

天使の都の墮天使たち

舞台はパツポン・ストリートだ。

ベトナム戦争において米兵たちの下半身の前戦基地となった、パツポン。

今も無数のゴーゴバーが並び、年金生活のアメリカ人や有給休暇のドイツ人が、子供のように小柄なタイ娘を漁っている。

基本的には外国人、それも白人の街だ。

インチキ旅行屋スミットが押しつけてきたじゃゆきさん志願の美人女優の魔手をのがれて、僕は毎晩、飲んだくれていた。

女は眺めているのに限る、というのが僕の信念で、だから、タクシーの中でいきなり男の乳首を舐めるようなテクニシャンの美人にひっかかってた日にや……なんて話はどうでもいい、舞台はパツポンだ。

ナポレオンという名の、時代錯誤なジャズクラブ。ミュージシャンは、ベトナム戦争時のキャンプ廻りの生残りたちだ。バイト女子大生のウェイトレスに一人、清纯派と形容したくなるような女の子がいるせいもあって、

売春窟。パツポンに似合わぬその店が、もっぱらのお気に
いりだった。

それと、『アナタのための涼しくて静かな場所』……と
看板にサブタイトルされた、もう一軒のちっぽけな店。
そこにはカウンターの隅にいつも、ファランの老人が陣
取っているのだ。

ファラン……というタイ語、翻訳するならば『外人』
となる。

けれど中国人や日本人はファランとは呼ばれない。あ
くまでコン・チンであり、コン・ジープンだ。『外人』と
いう言葉のニュアンスの中に、タイ人と同じような顔を
した日本人は含まれない。

年老いた白人は、知ってみれば何てことない、店のオ
ーナーだった。いつもいるのは当然だ。

となりの『日本人街』タニヤ通りと違ってパツポンは
白人の、ファランの街だ。

それと、子供のように小さな身体で、そのくせ色っぱ
いタイの娘たち。道行く男たちに秋波を送りつつ、肌も
あらわなビキニ姿で腰をくねらせて誘う。

流行りなんだろうか、前髪を逆立ててデップでかため
たヘアースタイルが多い。むやみに尻の大きい日本の

女の子とちがって、みんな柳腰でプロポーションがいい。
主役は、フアランと逆毛娘たちだ。僕は、単なる観客
にしか過ぎない。

「嘘ツ、嘘でしょ？ この街で女を買わないオトコなんていないわ」

けれど、紅灯の巷に沈澱してチヨウチンアンコウみた
いに上目づかいに世界を眺めるなんて趣味、理解される
はずもない。その店でもしつこく聞かれたものだ。

「紹介してあげるわよ、アタシの店にもいい娘いっぱい
いるんだから」

ひどく生意気なその女の子は、毎晩マルボロのカート
ンを積みあげてコーラを飲んでいるという奇妙な娘だ。

涼みにきた同業者だろう、大量にマルボロを仕入れる
なんて同業者に決まってる。

「オレは単なるドラッカーさ」

そう、僕みたいなのには手頃な店だ。

二人分くらいありそうに太ったオバサン、冷房が苦手
でいつもセーターを着込んでる三十女、口のいやしいジ
ヤパニーズのために、いつもポテトチップや南京豆を買
いに行ってくれる、木登りの得意なチビ娘。

もつとも、そんな色気のない女ばかりじゃない。

やたら色っぽいママさんがいる。その娘、まだ中学生のくせして異常に色っぽい少女もいる。ついでにその父親まで常駐している。例のフアランだ。

女を目的としない客にとっては、もうしぶんのない店だ。だから、……いつも客はいない。

「オレは物書きだからね、観察しているだけさ。この街を」

穴ぐらみたいに狭苦しいこの店と、身持ちの堅いアルバイト女子大生ウエウのいるジャズクラブ、ナポレオンと。金とセックス。欲望丸出しの下品な街を横目でうかがいつつ、こうやって沈溺しているのが、一番、心地よい。

けれど、欲望に眼を血走らせたオトコばかり見慣れたその娘には、そんな世迷いゴトは通じない。

「そんなの、信じらんない」

マルボ口を抱えて、彼女は店にご出勤して行くのだった。

さて、僕もまた出勤しなくてはならない。そろそろ、いい時期じゃないだろうか、いくら相手が身持ちのかた

い女子大生アルバイトだとはいえ。

赤裸々な欲望が渦を巻くパツポンに似つかわしくなく、筋の通ったジャズの生演奏を聞かせる店、ナポレオン。その無数のウエイトレスの一人として水割りなんぞを運んでいたのが、ウエウだ。

はじめての夜、視線が合っただけで僕はすっかりイカれてしまった。

若き日の八千草薫そっくりのチェンマイ美人なのに、すぐく悲しそうな、不幸せそうな表情をしている。

不幸せな女って、男心をそそるものだ。

二日目、『大丸』で仕入れた日本製のスナック、チョコレート類をプレゼントした。

三日目、シルクのスカーフ。

四日目、この国では高級品であるリンゴ。

そんなわけで、僕にすっかりなついてしまい、ウエイトレスのくせにテーブルを離れようとせず、同僚やほかの客の顰蹙を買いまくっているウエウに、次の日、……つまりゆうべ、ちょっとしたイタズラをしたのだ。

五日目、五つ星ホテルのフローリストで作らせた花束を抱えてパツポン・ストリートに赴いた。

道路いっぱい、ガラクタ売りが出ている。二セのロー

レックス、ニセのヴィトン、ニセのシャネル。なんでも
ある。ないのは本物くらいのものだ。

ニセモノ売りの少年をつかまえて、花束を渡した。

「……えっ、ボクにかい？」

「馬鹿ッ。いいか、あそこにナポレオンという店がある
だろ？ 十分たつたら行って、ウエウっていう女の子が
いるから渡してくれ。ただし、……絶対に僕からだって
言うんじゃないぞ」

国家公務員の一週間分の給料に相当する、たまらなく
派手な花束を抱えて少年が出現したのは、ちよつとした
見ものだった。

店のざわめきが一瞬、途切れる。

それが自分へのプレゼントだと知って、しかも僕が知
らん顔していたせいで、ウエウはほとんどパニックだっ
た。

「アナタから、でしょ？ ね、ね、そうなんでしょ？」

ついバレてしまったのは、ニヤニヤ笑いのせいだ。そ
んなにも効果的だとは思わなかったから……。

今夜こそとの決意もかたく、勇んで店を出たとたん、
雨に出鼻を挫かれてしまった。

雨季だもの、しょうがない。

バタバタと露店をたたんで走りまわるガラクタ売りたち。

見る見るうちに水位が上昇してくる路肩の洪水をさけて、道路のまんなかを歩く。

熱帯のスコールを浴びながら歩くのは、決して悪い気分じゃない。まして好きな女に会いに行くんだっただけのおさらだ。

パツポンのメインストリートの中心、每晚熱心に声をかけてくるシロクロシヨ一のポン引きがたむろし、前後左右のゴーゴバーの騒音がミックスされて轟きわたる一角にあるナポレオン。僕はドアを開いた。

目ざとく僕を発見したウエウの親友、まだ十八、九の若い娘が寄ってきた。

「やあ、元気い？」

なんて、覚えてたのタイ語で挨拶してやったのに、あれ、なんだか様子がおかしい。

涙ぐんだような、あるいは酔っぱらったような、赤い瞳をして僕を睨むのだ。

フアランの客ばかりのジャズクラブのウェイトレスのくせして英語をしゃべれない彼女、訴えたくても言葉が出てこない。……そんな表情。

もう一人のウエウの友だち、カラオケ・バーのホステスあがりの娘が出てきた。

その娘もまた、様子がおかしい。

「ニホンジンには、人情つてものが、ないのツ？」

口をついて出た言葉。

それはれつきとした日本語だったにもかかわらず、しばらく意味が理解できないまま僕は立ちすくんでいたのだった。

「経営が苦しかったんだろ。ほら、女の子だっていっぱい雇ってたし。それも十年も勤めてるようなオバサンが、いい給料貰ったりしてたから」

ラーメンを啜りながら、ミスター・ヒロが説明してくれた。

この国には長い、僕の友人だ。

やっぱり、飲んだあとはラーメンに限る。それもバー

ミーナムじゃなくって、サツポロラーメン。

酔っぱらい相手のラーメン屋がちゃんとあるのだ。なにせ、ここは日本人通りと呼ばれるタニヤだ。

「でも、いきなり今夜がラスト・ナイトだって言われて

もねえ。お客さんがキープしたボトルはどうなるんですかねえ」

「みんな飲んじやったんじゃないか？ 女の子たち、ベロベロだったもの」

少なくとも僕がキープしたジョニーウオーカーの黒は、女の子たちに寄ってたかって飲まれてしまった。

まだ「世界は日の出を待っている」のメロディーが耳に残っているような気がする。

バンドマンたち、やけになったようにそればかり演奏していたのだ。

でも、もう日の出はやってこない。

ベトナム戦争の名残りとどめたパツポンのオアシス、ジャズクラブ・ナポレオンはツブれたのだ。

悪名高き世界の成金、ジャパニーズが買いとって、美人ホステスを揃えたカラオケ・ビルを作るのだ。

だから、女の子たちは今夜限りで全員クビなのだ。

「クリスマスまでに開店させたいんだと。だから早く出てってくれ、ってことだけどね」

失業したウエウが困ったような顔をしていたのが眼に浮かぶ。

もつとも僕にしてみれば、その誰かさんのおかげでウ

エウと旅行できることになったんだから、痛し痒しだ。

旅行つたつて、アメリカ人お得意のゴーゴーガール同伴パタヤ愛欲ツアーなんかじゃない。入院している母親の見舞い、里帰りに同行するだけなのが悲しいけど。

「アリガトゴザマシタア」

不思議なイントネーションの日本語に送られて、僕たちは店を出る。

タニヤ・ストリートは銀座や新宿とおなじだ。漢字、カタカナ、ひらがなの看板が濫立し、美女たちが接待費を握ったジャパニーズ・ビジネスマンを待っている。

店の入口に立つ女たち、いずれも日本人好みの色白な美人ばかり。ウエウとおなじように北部の出身だろう。

「きれいな娘が多いんだなあ、レベル、高いですねえ」

「ジャパニーズ・ビジネスマンはカラオケ歌っただけで帰るからね。『肉体労働』しなくていいから美人が集まるんだ」

ビール一本二百円のゴーゴバーとはケタちがいの値段であることは言うまでもない。しがない物書きには無縁の場所だ。

「二ホンジンって甘いんだな、抱きもしない女に高いカネを払うなんて」

でも、それは悪いことじゃないのかも知れないなんて、チラツと思ったりする。

ケチなアメリカ人はゴーゴーバーで閉店までビール一杯でネバっては女を漁り、処女マニアのイギリス人はチエンマイの女郎屋で山から買われてきた少女の初物を買い、むつつり助平のドイツ人はパタヤでソーセージを食いながらボディコンの売春婦に視線をめぐらせ、戒律厳しきアラブからきた貧乏人たちは一人の女をワリカンで買ってはアナル・セックスを強要する。

逆毛娘たちは、この国の光り輝くもうひとつの宝石、重要な『産業』だ。そしてそれぞれのランクに応じた相手に身を売る。

インチキ旅行屋スミットの紹介でモーシヨンかけてきた女優だつてそう。

…… あんないいいオンナとヤラないなんて、どうかしてるぜ。

その通りだ。アレは華僑の金持ちのオモチャだ。最高級のサファイアと同じで、本来、観光客が買えるシロモノじゃない。

女たちは、逆毛をデップでかため、唇にはシセイドールのリップスティックを塗り、シルクのスーツを身にまと

って男を待つ。

僕みたいなのは招かれざる客だ。夜の巷をウロつきながら女を買わないなんて。

嫌いじゃないんだけどね。元気いっぱい男の気を引こうと懸命な女の子たち。

「日本はお金持ち、でも、タイは貧乏な国なの。でも、だからって日本に働きに行くのはとても難しい」

マルボロ娘はご機嫌斜めだ。ひどくからんでくる。

「なのに日本人はそうやって、平気で女を買いに来る。まさかパツポンで説教されるなんて思ってた。なかった。

これじゃゴールデン街だ。

「オレは女を買いに来たんじゃない。ただ飲んでるだけだつて」

「嘘、そんなヒトいるわけない。……いいわいい娘、紹介してあげる。アタシの店に来てみる？　すごく高いけど。アナタに払いきれるかしらね」

青臭い書生談義のあげく、挑発して女を買わせようなんて、新手的ポン引きだろうか。いや、いくらバンコクでも、そんなバカな話があるわけない。

でも、この娘そのものに、興味があった。

毎晩、観察しているけれど、こいつはキャッシャーだ。オーナーの娘か、親戚か。いずれにしたって、身内だ。レジの前に座るのは、そうに決まってるから。どんな店なのか、覗いてみたい気もした。

二ホンの建築屋がさっそく改築に励んでいる『ナポレオン』の残骸を過ぎて、マルボロ娘の案内に、僕はついていった。

……なんだ、やっぱりゴーバーか。だったらビールが三十五バーツ、煙草ひと箱分じゃないか。

けれど、マルボロ娘は黙って店内の階段を登ってゆく。胸騒ぎの予感。そう、この国のシステムでは二階というのは……なんて話はどうでもいい。すぐにわかる。

ギシギシと軋む階段を上ったところは、かなりヤバい場所だった。

毎晩飲み歩く僕にはおなじみの、あの客引き。……シロクロシヨ、セックスシヨ、ヤスイヨ、ゼンラ・バーネ。ひとつ覚えの日本語を飽きることなく毎夜ささやきかけるポン引きたちの宣伝でおなじみの、けれど一度も足を踏み入れたことのない、ボトムレス・バーだ。

「ここにお座んなさい。ほら、ビール」

勝手に出てきたクロスター・ビアーをあおりながら、眺める。

ビキニのブラを外して髪の毛を結んでるような娘ばかりのトップレス・バーだったら、知ってる。

が、ここの娘たちは、外すべき何もも身につけてはいない。もとから全裸だ。

「どの娘でもいいわよ。世話する」

裸でふらふら歩きまわったり、音楽に合わせてやる気のなさそうに踊ったり、無数にうごめいている女たち。

「いらない、女を買いに来たんじゃない。それよりビール、いくらだ？」

「馬鹿ねえ、アタシのおごり。タダよ」

キツネにつままれたような気分で、僕はあたりを見回すだけ。ほかにすることもない。

……女たち、ひどく暗いながらもわかる。みんなブスだ。

全裸バーにいいオンナがいるわけないのは勿論だけど、不思議なことに化粧をした女がひとりもない。

ショーが始まるから見ていけ、という誘いをことわって、店を出る。なんだか今夜は悪酔いしたみたいだ。

ふらつく足で三輪タクシーのサム口に乗りこんで、僕

はまだ考えている。

……なんであいつら、ブスのくせに化粧しないんだ？
ここで一つの推論。

『化粧は女の資本である』とする。

貧乏なブスは化粧品を買えない、化粧のしかたも知らない。だれも化粧品なんか買ってくれないし、化粧のしかたを教えてくれるわけでもない。だから、売春婦になっても食うことすらままならない。

プロだけじゃない、素人だって金持ちほど化粧がケバ
い。

さほど金持ちでもなさそうなウエウにしたって、アパートにあつたのは化粧水とリップステイクだけだった。
好きで薄化粧してるんじゃないのかも知れない。

持つて生まれた美醜と、その差をますます助長する化粧品と。バンコクの女たちは厳しい生存競争にさらされているのだ。